# ――言語応用今昔――

## 言語応用学専修

井狩幸男先生・関茂樹先生・田中一彦先生・山崎雅人先生

文学部改組のため 2019 年度以降に入学する生徒の受け入れを停止する言語応用コース。今号では改組前最後の機会ということで、言語応用学コースにて教鞭を執っていらっしゃる 4 人の先生方に、それぞれの「言語応用学」観や 20 年以上にわたるコースの歴史、言語応用学の視座からみた文学部、ひいては高等教育の行く末など、言語応用学から拡がる様々なお話を伺いました。

仲林：では早速なんですが、言語応用コースの歴史について教えてください。

山崎：歴史は……1998 年ですかね、田中先生がこの大学に来たのがこの年でしたね。

田中：その年にちょうど言語情報コースができて。

山崎：そうそう、表現文化コースと一緒にね。今年が 2019 年だから……20 年ですかね。そして、学生さんがいなくなるのが 3 年後くらいですか、今度 2 回生で来る人が最後と。だから 23 年くらいの歴史なわけですね。今回フォーラム人文学でこういった形で特集していただけたことはありがたく思います。今までで退職された先生は 3 人いらっしゃるので、指導した教員は 7 人ということになりますね。学生の数は増えましたね……今は 12～13 人くらいかな？

田中：最初の頃は少なかったですもんね。

中川：そうなんですか？

山崎：最初のときは 4 人でしたかね。男性が 1 人で女性が 3 人でした。最初は得体の知れないところだったから……。

一同（笑）

中川：確かに、名前から想像がつきにくいというのもあったかもしれませんね。

井狩：表現文化コースと同時にできたときのコース名は言語応用じゃなくて言語情報だったからね。この中だと関先生が 1 番長く市大におられるんだけど……関先生、市大に来られたのはいつでした？

関：市大に来たのは 1985 年です。しかし最初は英米言語文化にいましたね。

井狩：僕が市大に来たのが関先生のちょうど 10 年後、1995 年ですね。僕も最初は英米言語文化にいました。英米がまず 2 つに分かれて英米言語文化と比較言語文化になり、比較言語文化がさらに表現文化と言語情報に分かれ、最後に言語情報が言語応用になり、現在に至ります。

中川：すごい……。

井狩：英米言語文化から言語応用への変遷の過程は、ある意味で、文学部の組織改編の歴史と重なります。最初は英文の先生も 20 人近くいて、教授会の構成員の数も 100 名を超えてました。

仲林：では続いて、言語応用学ってどのようなことをする学問なんだ、ということについて聞かせていただけますか？

山崎：言語応用学という名称は確かにあまりなじみがないです。ホームページを見ても、言語応用学って名称を挙げてるのはここと、それから……東京外国語大学が大学院の方であったかな、学部レベルではここだけで、ユニークな発想で作られたと。そして言語応用学という名称ですから、言語＋応用だと。この言語と応用というふたつをどのようにつなげるか考えたときに、『言語を応用する』『言語に応用する』『言語から応用する』という風に、間に文字を入れることで言語と応用の関係を表わすことができる。例えば、言語以外のものを、言語に応用するといった風に表せるんだということを授業で説明することもあります。卒論を見ても、少しでも言葉にかすっていればいいという感じで。言葉にかすっていなくても逆の意味でいいんで

す、非言語応用的なね。言葉を確認しながらその周辺をみていく。文学部自体が『学んだことを応用していく方法論』的なものを学んでくれたらいいって話をしています。心に響くかは別ですが。

一同（笑）

中川：他の先生方いかがですか？

井狩：先の改組の流れの中で、言語情報が名称変更をする際に、このコースには、英文法等の理論じゃなくて、英語運用能力の習得が期待されていました。それと関連する既存の学問領域に Applied Linguistics（応用言語学）がありますが、当時教室代表の芝原先生が、アメリカの大学のサイトから Linguistics Applied（言語応用学）の名称を見つけてこられました。そして、その名称の方が、今後本コースで扱われる領域を表す名称としてより適切ではないかということになりました。

関：私は途中で英米言語文化から移ってきたんですが、はじめは生成文法の研究をしていました。こちらに移ってからは言語情報ということだったので、言葉の伝達の観点からすると情報をどういう風に伝えていくかを主にテーマとして取り上げることにしました。古い情報と新しい情報の配列と語順との関係を主に取り上げたら、皆さんが興味を持ってくれるかなと考えました。古い情報から新しい情報へという配列の原則は、英文を解釈をするときはもちろんですが、組み立てるときもそういう原則に基づいていくと、自然なというかわかりやすい文ができます。卒業生で英語の教員になった人も、毎年一人はいるんですが、高校生にそういう話をして役に立っているようです。

田中：僕は、ここに赴任するときには、言語教育の授業を担当するように言われていたんですが、僕は井狩先生みたいに英語教育をかじってるわけでも全くないし、関先生とか山崎先生と一緒で僕も言語学というか文法が専門で、特に時制の研究をやってたので、正直いうと、言語教育の授業をするのはなかなか難しかったのを覚えてますね。98 年に来て、最初に「言語教育論演習」の授業を担当した時には、その当時は言語情報の学生はいなかったので、受講生は、ほぼ英文の学生でした。その当時は、英語科教育法というのを井狩先生がご担当じゃなかったんですよね。

井狩：よく覚えてないですね。でも、そうだったような気がします。

田中：そうなんですよ。ローテーションで英文教室の文学とか語学の先生が担当されていたので。

井狩：確かに、98 年ってそんな時代だったかも知れませんね。

田中：今でも覚えてるのは、この 11 階の、今言語情報学会やってるあそこで英文の学生集めて授業やってました。

井狩：当時の市大には、英語教育は英語についての専門知識があれば誰でもできるみたいな雰囲気がまだまだありましたね。

中川：では内容は変わりますが、先生方から見た市大文学部生とか、市大文学部の魅力や学生に求めることなどを教えてください。

仲林：親戚に文学部って何すんねん？と訊かれて、何するんやろうって、返答に困ったことがありました。

先生：小説書くとか？（笑）

仲林：ほんとにそんな感じでした！就職先ないやろって言われたり。ちょっと肩身が狭いんやなと。

井狩：僕は逆に文学部という名前に希少価値があるのが嬉しいですね。ポピュラーであるということは安定し

ているかもしれないけど、それでいいのかなという思いは常にあります。個人的には、市大の文学部がすごく好きで、言語文化学科以外に、人間行動学科と哲学歴史学科がありますね。新年度にはまた、新しい学科ができますが、市大の文学部では、他大学では独立の学部になっているような社会学、心理学、教育学等が学べるのがすごくて、懐の広さ感じます。その意味で。市大の文学部は、すごくユニークだと思います。

山崎：公立大学で一定の成績を修めて入ってくる人たちなのでまじめなイメージ、先生の言うことを聞くとか、授業にちゃんと出るという意味では真面目なんですが、そのイメージをそのままでいいのか、それを打破しないと社会でやっていけないんじゃないかという葛藤がありますよね。在学中に違う道を見つけるほうがいいのか、そのままの進路をとったほうがいいのか、という葛藤が人それぞれあるように思います。でも自力のある人たちなので、いろんな才能があって、それを外に発揮する力を持っているし、今は雌伏の時間で卒業後にそれが表れてくるという人もいますよね。ある種の力を蓄えている期間というか。そういう意味では立地や学情などの施設にも恵まれているところなので、そういう時間を過ごすには豊かな 4 年間を過ごせるんじゃないかなと思います。

田中：僕は、前は教育学部に勤めていて、そこの学生はすべて教員を目指すという一つの目標にひたすら向かって走っているということもあって、まじめさはあったけど、学生の多様性というのは市大文学部ほどは

なかったかも。教育学部も文学部同様、理系、文系の様々な分野の学問をやっている学生がいるんだけど、土地柄っていうのもあるかもしれないけど、自分の可能性を絞り込んでしまう学生が多かったような。市大の文学部もまじめさでは負けていない、でも面白いまじめな人がいっぱいいるという印象ですね。まじめに面白いことを普通にやっているのが僕には好感がもてる。ただ、学生とのつながりという意味では、福井時代のほうが緊密だったとは思います。これも土地柄なのかも。

山崎：文学部に入るって言ったときに何になるのって言われるっていう話ですけど、一つの考えとしては、色んな学問に接するでしょ？コースごとに。その学問を通じて、ものの考え方というか、特に問題発見能力かな、何が問題なのかを見抜いてそれをどうしたらいいのかっていうことを、考えると。実際の社会に出てからは、何が問題か分かった後は専門家がいるでしょうから、そこに任せるでしょう。ただし今は何かがうまくいかないときに本当の壁はなにかを発見するという、文学部で培った能力で問題の本質を見抜くということは社会に出てからも役に立つんじゃないかと思います。文学部っていうのは他の学部を従える、上にいてあれやこれをっていうことを裏でひそかにやるような能力を身に着ける感じ。それはどんな職業についても一定程度役に立つから。もちろん文章処理能力とか、頭の中で考えてることをわかりやすい文章にするとか、あるいは外国語と言う表現ツールを身に着けるっていうことを、文学部の学問を通して身に着けるというか。卒論でやることはものすごく細かいことでどこで使うか分からないけれども、それを通じて何を

勉強したのかというと、問題発見能力、という。問題解決能力でももちろんいいですけど、何となく役に立つというと、まあそうかなと。

中川：ありがとうございます。では最後に読者に一言お願いします。

田中：役に立たないことの方が面白いことが多いと思う。僕からすれば、役に立つことは大学ではやらない方が良いと思う。結果的には、先ほど山崎先生も仰いましたけど、役立てようと思ってやったことってあんまり面白くないから。もちろん理系的なことは役立てようと思ってやらないといけないのかもしれないけど、僕が今興味がある言語学的な問題は、一見すると、なんの役にも立たないけど、考えるだけでワクワクして面白い。これまでも面白いだけでやってきたことが結果的に役に立つということも往々にしてあったので、文学部の学生さんには、役に立つかどうかを基準にして自分がやることを決めないで欲しいなとは思います。とにかく、面白いことをぜひやって欲しい。

山崎：市大は歴史があるし、蓄積された知のノウハウが大学全体にありますので、入るのに良い選択であると。入った人は是非使う知恵を在学中に身につけて欲しいなと。ついつい時間割通りに行動してるとルーティンになれてしまうでしょ？時々違う所に足を踏み入れてみるとかね、学情の中でも行ったことないところにちょっと行ってみるとか。慣れたときに自分なりの開拓努力をするとまた違ったものが見えてくる。キャンパスには、いろいろな施設があるので、見に行ってみると面白いですよ。市大を再発見してください。

関：自分にも当てはまることなんですけど、学生の皆さんは、たまたま目にした新聞でも本でも良いんですが、あるいはあまり自分が予定していなかった経緯で遭遇し、知り合った人は、若いときはどうとも思わないかもしれないんですが、必ずしもでたらめに出会うのではなくて、後で非常に重要な本だったり、友人になったりすることがあります。ちょっと一歩止まって、これは今は分からないけど後で影響を受けるかもしれないという風に、受け止めてもらえたら良いんじゃないかと思います。若いときはいろんな出会いがあるのでどんどん変化していくんですが、ちょっとそこで立ち止まって、記憶にとどめることが必要だと思います。

井狩：この４月に新入生に配る「アンロゾ」という冊子に、自分の学生生活の振り返りを、先日書かせてもらったんですね。中学、高校は体育会系で、サッカーとハンドボールをやってましたが、無理矢理勧誘され渋々始めた混声合唱が、入れば結構楽しくて、4 年間やり通しました。でもクラブ三昧ではなくて、その間にいろんなことをやりました。たとえば、夏休みには、長野の白馬で英語の世界で有名な先生と一緒に寝泊まりして、話に熱中したり、国際基督教大学で幼児言語学会に参加したり、ゼミの先生と海外の国際学会に出席して、その後、アメリカを１人で歩き回るというように、自分の興味あることに挑戦していました。全然周りの人のことを気にしなくてもよくて、おもしろいと感じることをやってみたらいいと思う。ネットとかの間接経験の世界に生きるんじゃなくて、直接経験を通して、実際に自分の肌で感じて、気づくことが、人生の糧になり、貴重な宝物になると確信しています。そのためにも、いろんな経験を通して沢山の人との出会いがあればいいなと思います。

中川：ありがとうございました

インタビュー・写真：中川 京香
仲林 亮祐

左から
山崎雅人先生
井狩幸男先生
関茂樹先生
田中一彦先生